花物語

関 千枝子

汐文社

ヒロシマ花物語

関 千枝子

汐文社

著者　関　千枝子（せき　ちえこ）

1932年大阪に生まれる。
早稲田大学文学部露文科卒。
毎日新聞記者を経て，現在，全国婦人新聞編集長。「横浜の図書館を考える集い」代表。
著書
『広島第二県女二年西組－原爆で死んだ級友たち』（筑摩書房）＝第33回日本エッセイストクラブ賞受賞，ジャーナリスト会議奨励賞受賞。
『図書館の誕生－ドキュメント日野市立図書館の20年』（日本図書館協会）
『この国は恐ろしい国－もう一つの老後』（農山漁村文化協会）
『長い坂－現代女人列伝』（影書房）

ヒロシマ花物語

1990年7月15日　初版第1刷発行　　定価はカバーに表示してあります。

著　者　関　千枝子
発行者　吉　元　尊　則
発行所　㈱　汐　文　社
東京都文京区本郷1－26－10　中村ビル
電話　03(815)8421　振替(東京)2-14150

印刷　飛来社　　製本　東京美術紙工
装丁　高間デザイン室
カバー・見返し写真提供　㈱アボック社

ヒロシマ花物語

関 千枝子

汐文社

ヒロシマ花物語●目次

I

原爆花物語――5

松葉牡丹 6

みやまおだまき 11

蓮 21

夾竹桃 29

白バラ 37

ガーベラ 52

II

『広島第二県女二年西組』余聞――55

玖村姉弟のこと 56

一枚の写真 63

〝スキャンダル〟のあと 73

教え子の掩(おお)いとなりて ―原爆で亡くなられた波多先生を思う 82

四十二年目の夏・広島 92

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

III 原爆前後 101
大人への旅 102
春日通り北端 107
本を焼く 111
とうがん 116
愛犬ベアの思い出 119
めくるめく秋 126
浅野図書館被爆物語 135
IV 原爆を書く 145
原爆を書く 146
韓国被爆者のこと 153
人形 158
靖国と〝弾よけ〟の神 175
あとがき
初出一覧

I

原爆花物語

松葉牡丹

花屋で松葉牡丹の苗を見た。なつかしい、と手を出し、迷い、結局買わないで家に帰った。松葉牡丹――。この花は私にとってはただの花ではない。〝原爆の花〟なのである。松葉牡丹を見ると〝あの日〟のことが思い出され、植えたい気もちと拒む心が交錯する。

〝原爆の花〟というと夾竹桃ということになっているようである。いま、広島には至るところに夾竹桃が植えられている。のちに広島市長となった浜井信三さん（当時市の配給係長）が、救援活動の中で、炎暑の中、焼けただれた町に毅然として咲く夾竹桃の赤い花が印象的だったから、という。だが、〝あのとき〟私は夾竹桃を見た記憶は全くない。

私の住んでいた広島市宇品は、明治期、埋立てでできた町である。私の家のあたりは宇品港から二キロも離れているのだが、庭土は砂地でサラサラしていた。わが家の庭は〝日本式〟できちんとでき上っており、余分の木も花も植える余地がなかった。そんなとりすました庭に反発して、私と姉は飛石のまわりに松葉牡丹をまいてみた。見る間に一面に芽を出し、育ち、七

月に入ると美しい花が咲き出した。濃い桃色や赤の松葉牡丹の花は砂地と石によくあった。戦争は末期に近づいていた。私たちが花を愛でるゆとりを失わなかったのは、広島がまだ空襲を受けていない呑気さ、だったのかもしれない。

私は旧制女学校の二年生だった（いまの中二）。二年生になったころから戦争の様相はすっかり変わっていた。臨時動員の日がふえ、学校で勉強できる日は目に見えて減っていた。二年生でも、恒常的な勤労動員（工場などに）に行く学校も多かった。私たちの学校は、まだ二年生は工場へ行っていなかったが、この夏は、夏休みも日曜も返上。八月五日から疎開地の後片づけ作業が始まり、かなり長期の作業になる見通しだった。

作業に行く日は、仲よしの為数美智子が私の家にさそいに来てくれた。彼女といっしょでないと、その前の年に広島へ来たばかりの私は、どういうふうに行けばいいのか、見当もつかなかったからである。美智子が私の家に来るとき、必ず庭の方にまわり、飛石づたいに縁先に来て私をよんだ。多分、その方が玄関より入りやすかったのであろう。私もズック靴を縁側においておき、美智子と二人、松葉牡丹の咲き乱れる中を門の方へ向かった。

その朝も美智子は縁先に来た。私は下痢で寝ていた。まどろみながら、私は母と美智子の会話を耳にし、いまも、昨日のことのようにおぼえている。

六日から八月十五日まで、松葉牡丹は咲いていた。三キロの距離があり、焼けなかった私の

家のあたりでも、トマトや蓮の葉は熱線に弱いのか、葉先が焼けこげていた。葉が全部やられ、実だけが茎にしがみついているトマトは無惨だった。そんな中で松葉牡丹は小さな身体を昂然とそらせて咲いていた。さわぎの中で、水をやるものもなく、庭はカラカラに乾いていたが、少しも勢いの衰える様子はなかった。松葉牡丹の花色の陽気さは、死臭のただよう広島で、異様にさえ思えるほどだった。

八月十五日まで晴天つづきの炎暑、太陽はぎらぎらと照りつけ、傷ついた者、身うちを求めて焼けあとを歩きまわる人々を苦しめたが、終戦の日を境に天候が一変した。雨が降りつづいた。そして九月、追いうちをかけるように台風が来た。「枕崎」と呼ばれたこの台風は、空前の被害をおこし、原爆で痛めつけられた広島の人々にダブルパンチを与えた。宇品一帯は土地が低いので、床上浸水した家が多かった。私の家は相当高く地盛りした上に建ててあったので、家自体は無事だったが、庭全体が水びたしになった。池と庭との境目がなくなり、大きな庭石まで水で隠れて行く様は怖しかった。

台風が去り水がすべてひいたとき——松葉牡丹は一株もなかった。

翌年、私たちはまた松葉牡丹の種子を庭にまいてみた。だが、どうしたことか、今度はただの一つも芽が出なかった。庭の土自体黒ずみ、重たく、以前のサラリとした砂地の面影はどこにもなかった。以来——松葉牡丹はわが家と関係のない花となった。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

美智子のお母さんは花が好きな人だった。庭はさして広くはなかったが、一面に草花が植えてあった。あのときも何か花が咲いていたかもしれない。

火傷した美智子が家に帰ってきたと聞いて、私は七日の午後、美智子の家に行った。庭に面した南向きの座敷で、美智子と美智子のお母さんが寝ていた。お母さんも隣組からの動員で同じ場所に作業に行き、火傷を負ったのである。二人の枕もとに座った私はたしかに庭も見ているはずである。それでいて、花が咲いていたかどうか、全く覚えがない。動転していてそれどころではなかったのだろう。

昨年の夏、私は当時尼崎にいた美智子の弟さんを訪ねる機会があった。ほぼ半日も、思い出などを語りあったのだが、ふと私は、原爆といってすぐ思い出す草花はありますか、と聞いてみた。「ほおずきですね」と彼は言下に答えた。ほおずき。私の表情がいかにも意外そうに見えたのか、彼は説明してくれた。学童疎開に行っていた彼が十月に帰ったとき、母も姉もおらず父一人が家にいた。母も姉も死んだことを聞く——小学生の子どもにとって、それがどんな思いだったか、想像しても胸が痛むが「そのとき庭にほおずきが真赤に生っていたのを覚えています。母が丹精していたものでした……」。

ここにも一人だけの〝原爆の花〟がある、と思った。

花を見ても木を見ても、空を見ても、海に来ても……、思いはめぐっていつか原爆にかえっ

ている——。これは原爆の被害者の悲しい性なのかもしれない。

やはり松葉牡丹の苗を買うべきだ——。私は意を決して花屋へ行ってみた。たくさんあった苗は一株もなかった。売り切れたらしい。今年も松葉牡丹はわが家に関係ない花だった。だが来年見かけたら——。今度こそ買おう。私ひとりの〝原爆の花〟、いや、〝反戦の花〟として。

この文章を書いた翌年、私は松葉牡丹を、たった一株買った。

が、この株は間もなく枯れた。一九八九年、もう一度、松葉牡丹を買った。この株も勢いがなかった。やがて植えた場所が少しくぼみとなり、水がたまりすぎることがわかり、株を、プランターに移した。

株は息をふき返し、秋まで咲いたが、細々という感じで、いま一つ勢いがなかった。八月、広島へ行ったとき、平和大通りの花壇に松葉牡丹が植えられ、見事に咲いているのを見た。

それは本当に、〝見事〟というしかないあでやかさで——八月の広島の強烈な太陽によくマッチしていた。やはり——松葉牡丹は広島にふさわしい。

みやまおだまき

初夏になると〝みやまおだまき〟を思い出す。紫色の五弁の花を、うつむきかげんにそっとひろげた品のいい姿を――。そして、その姿は、原爆で亡くなられたピアノの先生の長橋八重子先生のおもかげと、二重うつしになる。

一九四四年の五月、父の仕事のため東京から広島へ移った私たち姉妹は、落ちつくと、長橋八重子先生のもとで、ピアノの稽古を再開することになった。何事にも一流好みの母が、〝広島で一番の音楽の先生〟を探したのである。

長橋先生は広島女専の先生で、私たちの転入した広島県立広島第二高等女学校は、女専の校内の一隅を借りている学校であったから、何かと都合がいいと思ったこともあったのだろう。

長橋先生一家は、夫君（当時すでに亡くなっておられたと記憶する）もご兄弟も音楽関係者という、広島では有名な音楽一家であった。ご子息一人で、この方も音楽修業を積まれていた

が、出征中だった。

長橋先生の第一印象は、〝なんとも上品な老婦人〟、だった。今考えてみると長橋先生は、もしかしたらいまの私と同年輩か、少しお若いくらいだったのかもしれない、などと思うが、子供の常として、実際より年を多く見ていたようだ。ただ、そのイメージは、なんとしても〝老婦人〟であって、絶対に〝おばあちゃん〟ではなかった。そして、お声を聞いて、玲瓏（れいろう）な美声に、圧倒されてしまったのを覚えている。声楽の指導をされている時の先生の声を聞くと、本当に〝音楽〟という感じがするのだった。

先生のお家は素敵だった。中心街からそう遠くない小町（こまち）にあったが、とてもモダンで、これだけハイカラな家は当時の広島では珍しく、東京でもあまり見たことがないと思った。

玄関を入るとこじんまりしたホールがあり、その一隅の長椅子でレッスンの順番を待つことになっている。自分の番が来てピアノのある部屋に入る。この一瞬胸がワクワクとするのだった。それほどすてきな部屋だったのだ。

それは非常に広い部屋だった。その一番端に、背中あわせにグランドピアノが二台おいてある。練習はドアに近い方のグランドピアノでするのだった。壁のあちこちには、天井まで届くキャビネットがいくつか造りつけになっていた。その中にはレコードがぎっしりあって、あのレコードを全部聞いたらどのくらい時間がかかるかしら——と思ったりした。壁のあちこちに

は、ステンドグラスがはめこまれていて、ゴージャスな雰囲気である。

さらに――。この洋間は天井が大変高く、吹きぬけになっていた。ピアノの逆の部分――応接セットなどが置かれている上は二階で、ピアノの側から見上げると、手すりが魅惑的である。私は吹きぬけをもった洋間のある個人宅を見るのははじめてで、なんとも豊かな思いになるのだった。

もの静かで上品な長橋先生は、また、大変厳しい方でもあった。妥協されない。曲をちょっとでも弾き損じると、「もう一度やりましょうね」。絶対に先に進ませてはくださらないのである。時には「もっと練習しなければダメです」と、ぴしりといわれることもあった。

正直にいって、私は、全くピアノの才がない人間である。断続的にだが七年も練習したのに、ソナタの初歩の曲がようやくという有様。練習も好きな方とはいえない。しかし、このときは、私にもいい分があった。「そんなことをいったって練習なんかできませんよ……」。

戦争は末期に入るころで世の中は殺気立っていた。ピアノを弾いていると「非国民、やめろ！」とどなられることもあった。非常時なのに、と白い眼で見る人が多く、音を出すのに気がひけた。当時のピアノには、消音器などついていない。

ピアノを弾くこと自体はばかれるご時勢で、こわいこわい先生であったのに、不思議なことに稽古をやめようとか、休もうとかは、一回も思わなかった。それは先生に惹かれるものがあ

ったからだと思う。

そのころ学校の生徒は防空頭巾をいつも持っていなければならないことになっていて、袋に入れて肩から下げて通学していて、母は帯の芯地で袋を作ってくれた。白一色の袋では味気ないと思ったのだろう、花の刺しゅうをしてくれた。

華美なものはぜいたく。ぜいたくは敵だ。ささやかな刺しゅうでさえ白い眼でみられる時代だった。せっかくの母の気もちなのに私は刺しゅうを隠すようにして持っていた。

ある日、長橋先生はふと私の防空頭巾袋に眼をとめられ、輝くように笑われた。「まあきれいだこと。お母さまがなさったの？　それ……」手にとってじっと眺めておられた。先生はきれいなものが好きなのだ！　私はとてもうれしかった。

先生の家の帰り、まだ数軒残っていた古本屋に寄ってみるのも楽しみだった。一九四四年には、まだまだちょっとした古本があった。

一九四五年に入ると戦局は一段と厳しくなった。まだ寒かったころと思う。先生のご子息の戦死の報が入った。たった一人のご子息で、しかもあとつぎとして嘱望されていた方の死である。先生の嘆きは深く、見るも痛々しかった。だが、先生は稽古を休まれることもなく、レッスンは相かわらず厳しかった。「もう一度練習しましょうね」と静かに、毅然といわれると、自分の怠惰さがやりきれなくなることもあった。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com